松浦記集成附錄

卷ノ四

國費
文書係
第　號
年　月　日 朝入

48587
0791
15縣
16=8
S219
マ

松浦記集成附録巻之四

目録

三韓征伐御出張城并守護交代姓名
三韓賢人
三韓王獻物
北面之人々并知行高
古代城唱所
吉峯城
猪ヶ城
猪ヶ城釣田家代々法名
波多參河守代々法名
神田五郎代々法名

図 045

七項目…願ヒマス…願ヒマス

一、圖書ハ丁寧ニ取扱ヲ……
二、書中ノ紙ヲ折ラヌ樣……
三、指先ニ唾ヲ付ケテ頁ヲ送ラヌ樣……
四、語汁ニテ汚サヌ樣……
五、鉛筆等ニテ書入レヌ樣……
六、大キナ圖書ヲ片手ニ持ツテ讀マヌ樣……
七、圖書ヲ又貸セヌ樣……

0791
15縣
16=8

毛利肥後守代々法名
佐志將監代々法名
波多家臣姓名
波多家略傳
親公配所ヨリ書翰
僧侶の鄙言
僧侶の追號
波多戾代牧番津守高札町數
阿蘇大宮司惟直墓

○三韓征伐之御出張城
松浦古事記ニ云神功皇后三韓ヲ攻伐ニ給ひて後九州肥前國松浦郡大村鬼ヶ城を以て北虜の監塞として御殿有之征伐後御名代として北面ニ諸士等守護被仰付ル

一人皇十五代　神功皇后乙丑年四月入部　御名代　長麻　隼人
質人　朝鮮國　小次郎官者
質人　新羅國　太郎官者
質人　百濟國　藤平官者

一十六代　應神天皇庚申年八月入部　多氣兵庫之進
一十七代　仁德天皇丁酉年八月入部　岩城衛　盛

M46587.

一十八代　履仲天皇庚子年八月入部　永島織部
一十九代　反正天皇丙午年八月入部　西尾主殿
一二十代　允恭天皇丁丑年八月入部　下平右馬
一二十一代　安康天皇丁午年八月入部　榊田内膳
一二十二代　雄略天皇丙酉年八月入部　佐竹主計
一二十三代　清寧天皇辛酉年八月入部　安藤内記
一二十四代　顕宗天皇甲丑年八月入部　岩城大舍人
一二十五代　仁賢天皇乙丑年八月入部　青山大舍人
一二十六代　武烈天皇己丑年八月入部　佐竹轉
一二十七代　継體天皇丙亥年八月入部　田南内記
一二十八代　安閑天皇甲卯年八月入部　岩田右馬
一二十九代　宣化天皇辛巳年八月入部　麻田大炊

一三十代　欽明天皇庚申年八月入部　八田主殿
一三十一代　敏達天皇壬子年八月入部　吉田九内丞
一三十二代　用明天皇丙午年八月入部　古毋里勘解由
一三十三代　崇峻天皇丙酉年八月入部　三田仲藏
右代々大村鬼ヶ城ニ住此所ニ火雨防金ノ房ニ三ヶ所有
一三十四代　推古天皇（御名代）葛原親王甲寅年八月入部
用明天皇第四王子也十六歳ニ〳〵て田中村島村城ヲ開後見
岡本山城守同所峯ノ館ニ住
一三十九代　天智天皇甲子年筑紫筑前ニ内裏ヲ御移ニ有リ天智八
己巳年御移有之行年百七十九年ニ〳〵て大和國ニ御引有
之其節唐津領大枝村百姓千太左衛門と申者大枝村
一村百石拜領有之代々千太左衛門と号領之

一岡本山城守是吉　北面百騎之司

松浦郡筒井村ニ新城ヲ開四十二代天武天皇白鳳元壬申年ヨリ代々山城守受持也　六十一代朱雀院迄二百六十年之間王代受持

一六十二代　村上天皇天暦元丁未年筑紫王代

一知行二万石　松浦郡濱田城開　王代御名代　佐志　将監

一知行二万石　同　神田村住　久多　五郎

一知行三千石　同　秘多田村住　坂本右京之亟

二十四頭之司

一田數五町領　組下四人　日高内蔵允　壹岐左仲弁

一田數五町　組下四人　柴田宮内京

一田數五町　組下四人　瀬戸隼人亟

一田數五町　組下四人　村山左京之進

○三韓之質人

一朝鮮王代　小次郎官者

一新羅王代　太郎官者

一百濟王代　藤平官者

右何ヨリ武内宿禰初テ名ヲ御附被成三人共ニ代々如是也

○三韓王之獻物

一朝鮮國ヨリ　茶碗　織物

一 新羅國ヨリ　茶壺　織物

一 百濟國ヨリ　縮緬色々　安南ノ石燒茶壺

○北面之人々并知行附

一 五百石　椿崎芳野保早　一同上　関原壹代九道國

一 林　喜内秀郷　一　原田　保行

一 久河又七郎安永　一　大谷主水只國

一 山崎左門　渡　一　山上浦ノ亟宗實

一 和田四郎左衛門永方　一　近藤内記光秀

一 値賀信右工門　麥　一　佐藤牛千名秀

一 村瀬兎毛信年　一　市瀬甚九年永

一 三百石　今泉佐渡行春　一同上　今泉五郎左工門行永

一 手島勘解由政年　一　市木好兵衛寛政

一 宮野右京好茂　一　宮野七郎右工門好滿

一 宮野源内茂元　一　窪寺八内清覺

一 佐伯兵右工門道久　一　佐伯仲元風

一 浦田三郎右工門度本　一　浦田亘相年

一 橋本攝津守廣國　一　吉野六郎太半森

一 平林久米元度　一　平林八郎兵衛治行

一 秀島右近道信　一　阿部舍人年白

一 秀島左京中言　一　同　阿部枚　織部治秀

一 同八郎左工門春方　一　同　次郎九郎　秀

一 原田典一郎相源　一　松野尾右京進天茂

一 松野尾孫四郎行元

此次ニ三千石ノ家三人記有之組頭ノ家欠

一 三千石 山上十左衛門宗元
一 同 前田和泉守行春
一 同 秀島佐渡守政久
一 三百石 原田忠次忠度 一同上
一 秀島内蔵次國久 一
一 和多木久内秀政 一
一 吉田六郎左衛門元成 一
一 石野九郎兵衛秀白 一
一 佐藤新五郎元秀 一
一 佐藤三之亟雇輔 一
一 立花祐之亟孟把 一
大道寺隼人次治本
朝尾久米之亟茂福
瀬々兵部之亟満福
福原新七郎敬風
佐藤森之進本布
安井林四郎包綿
久野安藝福知
植田清次郎福久

一 植田門兵衛茂把 一
一 花村惣三郎武把 一
一 村瀬一徐満人 一
一 市木要五郎布人 一
一 阿部豊後附種 一
一 原 椎之進補人 一
一 村瀬讃岐福明 一
一 阿部力蔵武平 一
一 竹崎信濃峯寧 一
一 和田利八郎保高 一
一 辻 肥前扶高 一
一 木口時五郎芭早 一
花村早之次横傳
木根典市郎富綿
徳田伊豫之進邦税
瀬戸周防之次武濟
九鬼新七瞞濟
森 新九郎墨儿
原田阿波色半
山田米女邦武
桐谷肥後守茂平
常元新左衛門邦高
和多木八十仗末周
久米小次郎方文

右組頭

一田數五拾町　欽明天皇葛原親王孫　前田信之進

一田數五拾町　葛原之孫　宗田佐渡守

一田數五拾町　橘氏之孫　杉山兵庫之進

一田數五拾町　藤原姓大職冠鎌足之孫（一書：橘氏宗高親王之孫ト有之ハ書損歟）　秀島讃岐守

一田數五拾町　藤原姓大職冠鎌足之孫　山上十五左衛門

右之五人北面組頭　組下二拾人宛

○古代城と唱ル所

一城後城　人皇六十二代村上天皇天暦三戊申年　岡本山城守　関

一　同年　山上十五左衛門　関

一新久田城　同年　前田信濃守　関

一本城　同年　河副大和守　関

一畑城　後三條院代延文四壬子年　畑日向守　関

一吉峯城　秦三河守

一ニ鬼子岳ト云又岸嶽ト云當城ハ松浦源太夫判官久松浦党ニ開祖度トスリテ十七代波多三河守親ニ時文禄三甲午太閤秀吉ノ為没收セラル

一猪ヶ城　　鈎田越前守

一ニ獅子城ト云治承文治之間松浦冊後少将源披築ノ所也披戻之後平戸城ニ移ル跡古城トナリシヲ元亀天正ノ始日在城窪田因幡守ノ手越前守前東口ノ固トシテ此城ヲ再開シテ此ニ居ル其嗣上総介賢述二代居之鈎田一ニ窪田トス

一島村城　　葛原親王

田中村ニ在リ葛原親王築ク所也

一法行城　　古家周防守

板木村ニ在リ一ニ久我玄番トアリ古家氏築ク處也古家久家同キ狀

一松尾城　　松居和泉守

松尾和泉守築ク処トス

一鬼ヶ城　　草野宗瓔

神功皇后三韓征伐之為ニ築キ王ノ後草野宗瓔領スト云

一濱田城　　佐志将監

佐志村ニ在

一御嶽城　　久多五郎

畑津村ニ在リ一ニ畑津内記居トス久多五郎築ク処トス

一日在城

大川野川西村ニ在毛利肥後守築ク処ニ宣田国幡守居トス

毛利肥後守

右ハ分古事記ニ由此外一ノ巻古城ノ所ニ出

○吉峯城猪ヶ城知行高

吉峯城　三拾五万石

秦　三河守

古事記曰始ヲ九列採題八代ニテ大和守代落去ス大小諸士三百餘足軽七百余人外ニ与力百騎北面衆御無足此人々ハ田数五町宛

同一ニ日　拾万石

波多参河守

同曰六万石城主ト四万石家来ト大小諸士二百餘足軽三百六拾人御無足百人北面代々附人田数五町宛被下ル

右ハ通古事記有之

私按ニ秦氏ハ後波多ト改有之八代ニテ大和守落去ト云ハ鬼子岳城主ハ始ヲ侯松浦源太夫判官久ヨリ太閤朝鮮征伐迄十七代波多三河守親侯文禄三甲午年没収トナル然レハ八代大和守

落去ト云事如何疑ハ八代目變有ヲ本知三拾五万石ニ処拾万石ニ減タル事有テ如斯記シタル者欤考ヘシ大小諸士与力御無足足軽ニ至ラ減シタリ北面トニハ前書ニ有之三韓征伐以来御附人ナルベシ又ハ鎌倉将軍家時代千葉之衆九列探題トシテ小城郡晴氣城ニ来テ同郡ヨリ松浦郡ニ懸支配シタリ此時郡縣タリシカ封建替リタル由其時探題ニ附タル諸士郡切ニ分ラ封建ニ仕ヘタル欤ニ記録スルモアリ然シ北面客分抔ト記セルハ人皇三十四代推古天皇御名代葛原親王甲寅年八月北虜之監塞田中島村ニ城ヲ開き後見岡本山城守同所峯之館ニ住スト有リ其後右御出張止ヲ北面諸士封建ニ成リタル者ナルヘシト考

猪ヶ城 古事記曰 拾一万八千石

大小諸士二百余人足軽二百余

同 一万八千石

家来大小諸士三拾八人足軽百人 戦争落去ス

相知町數十三町奈良堺掛所後巻領ト成ル

右ニ通古事記ニ有之

私ニ按ニ釣田ハ鶴田ト同ニ葛之衆上総衆之誤欤疑ハ崖田越前守ハ日在城崖田因幡守ニ第剛勇ニ聞エ有松浦黨鬼子岳本家始一同ニ評議ニ上佐賀龍造寺筆奪ニ勢ヲ西國ニ振ヒ用心スベキニ時ヲ考ヘ右崖田越前守東口ニ固ノトミテ獅子城ニ古跡タリシヲ再與ニシテ群臣其外勢ヲ附本家鬼子岳ニ領内拾万石ニ支配

釣田越前守

同 葛之衆

ヒシ名有ハ者欤獅子城ニテ拾万石余ヽ高有ハ事諸書ニ見エス又右
古事記ヽ文ニ相知町數十三町奈良堺掛所後巻領ト成ルト此
文疑ヒ有宦田ト謚造寺戦争ヽ事ハ別記ニ有り宦田落去ヽ後
本家波多参河守領ヽ名目ニ反リヽ事ナラン欤尚考ヘヽ葛之処ハ
上総介賢庾ヽ事也疑ベカラス

○猪ヶ城釣田越前守代々法名

一圓應院　天平四壬申四月八日　一文徳院　大同三戊子九月十八日
一室山院　天安元丁丑七月十日　一迎林院　昌泰二己未四月四日
一大寳院　應和二壬戌五月七日　一了山院　寛仁三己未十一月八日
一休室院　永保二壬戌十二月六日　一了巻院　永久二甲午九月九日
一巻幼院　應保二壬午四月六日　一文昌院　安元元乙未七月七日
一泉林院　元暦二乙子十月廿日　一文秀院　元文元甲子三月四日
一昌覺院　文暦元甲午九月七日　一了覺院　暦仁元　七月十日
一了得院　宝治二戊申九月廿日　一源得院　文永十一甲戌四月三日
一本明院　栄仁二甲午二月四日

右代々墓所波瀬村ニ有石碑高野山奥院ニ有之

右ヽ通古事記ニ出疑ハ前矣賢庾ヽ二代猪ヶ城居住故右代々ノ院号ハ祭祀ヽ為ニ碑ヲ設ル者欤

○波多參河守代々法名

前勢州大守好政院殿　　應永二乙亥年七月十二日

前丹州大守好度院殿　　永享六甲寅年十一月八日

前三州大守好久院殿　　天文十四乙巳年八月十七日

前信州大守好教院殿　　永禄八乙丑年二月九日

前三州大守好請院殿　　文禄三甲午年三月九日

右代々墓所入野村ニ在リ　石碑　德須恵村瑞巖寺ニ在

參河守嫡男孫三郎法名

一翁了好大禪定門　　正保三丙戌年七月七日

右墓所共同所ニ有之ル処慶安元戊子年津田平左エ門ト云人執持ニシテ唐津東寺町少林寺ヘ御移シ有之ル跡寺　寺沢侯開基殊ニ開山和尚瑞巖寺ヘ轉住有之ニ付石塔御引被成ル其節ニ人足御願ヘ出ル賃錢一人ニ鳥目拾ツヽ取ニ被仰付ル由

○神田五郎代々法名

一清源院龍坊　天暦八甲寅年九月十九日

一恭源院宝山　寛仁三己未八月九日

一徳源院久山　永保二壬戌正月十日

一相源院了山　仁平　壬申四月十三日

一松源院實山　文永元甲子四月四日

一徳源院休伯　正中元甲子五月五日

一桐源院相白　應永廿三丙申二月四日

一政源院秀山　明應六丁丑十月九日

一好源院恭得　大永四甲申九月廿日

一幼源院了覺　天正十六戊子九月廿日

右代々墓所神田村ニ有之　石碑高野山奥院ニ有之

○毛利肥後守代々法名

一徳林院　天元五壬午九月廿日

一林松院　永保二壬戌五月四日

一清徳院　久安元乙卯八月廿四日

一青山院　元久　甲申七月七日

一龍泰院　宝治二戊申五月九日

一月相院　文永十一甲戌九月廿日

右墓所大川野村建福寺ニ有之

○佐志将監代々法名

一源近院泉應大得　正暦五甲午四月四日

一源桐院智昌大得　仁平二壬申五月七日

一源久院智相大得　正元元己未九月十日

一源通院智了大得　永仁三乙未六月十七日

一源傳院智生大得　永和三丁巳九月十七日

一源秀院智得大禅門　文安四丁卯十二月八日

一源慶院了山大禅門　應仁二戊子十一月十八日

一源政院了白大禅門　永正二甲子正月廿八日

一源覚院相通大禅門　天文四乙未正月四日

一源龍院室山大禅門　天文廿一壬子三月九日

右墓所佐志村ニ有之

一源生院智山大得　嘉保元甲戌八月十日

一源好院智室大得　元仁元甲申八月十七日

一源明院智泉大得　文永元甲子十一月八日

一源室院了千大得　正中元甲子十一月八日

一源相院智道大得　應永三癸酉丁酉四月六日

石碑高野山奥院ニ有之

○波多家臣姓名

一波多家瑞巌寺ノ石碑ニ　（好政 瑞巌寺）（好度 丹後守）（好久 三河守）（好数 信濃守）（好清 三河守）

一久多五郎源治茂六孫王経基十五代源治清五代ノ孫也

一佐志将監源亮　同三代ノ孫也

一久我氏ハ藤原得度ノ孫久我玄蕃允藤原保政先祖

保政ハ好政ノ男也

一保利播磨守藤原一休ハ好政ノ男也

一中山安藝守橘利度ハ好政ノ弟也

一木下伊豫守ハ橘諸江公ノ末真春末葉也

一岡本山城守橘是信ハ推古天皇家臣従大紋言是得ノ末葉也

一奈良崎周防守源光秀

一神吉信右衛門尉源保利　清和天皇末葉源保度ノ孫也

紋日ノ丸印矢車

紋片もみ印剣片もみ

紋丸ノ内一ツ引印大字

紋コンノウ團子貫ノ内片もみ

紋丸ノ内剣片もみ印三ツ引

紋丸ノ内二ツ引印久字

紋丸ノ内雉扇印一ツ引

紋丸ノ内銀杏印三ツ引

一 松尾阿波守橘真清　諸江公末裔橘真春ノ孫也

一 米倉新七郎源和秀　佐志將監五代ノ孫成ノ三男　千石

一 岩城時左衛門源吉光　久多五郎八男也屋鋪城中ニ在　五百石

本北面之臣

一 毛利五郎九郎 光綱　千石

一 毛利四郎 光本　千石

一 毛利壹岐守 周源　千石

一 秀島九郎 天品　厳原姓平野ニ以ツテ氏トス　千石

一 木下大膳 佐年　橘姓　千石

右五將平野郷ニ偶居各客分取計也

一 日高甲斐守藤原方秀　有浦　千石

一 日高左源治藤原方佐　有浦住　三百石

一 鶴田越前守 前　岩屋猪ヶ城　五百石

一 鶴田因幡守　大川野日在城　五百石

一 黒川左源太夫　黒川焼ヶ城　五百石

一 清水伊豆守 品　源品　石巻清水城　七百石

一 峯 丹後守一但　平一但　河面下郷峯　三百石

一 田代日向守林一　平林一　田代亀井館　三百石

一 江里長門守天相　藤原天相　佐里館　三百五十石

一 久家玄蕃 扶度　橘扶度ト　板木法行城　八百石

一 久家祐十郎扶源　橘ノト　同　百石

一 河副監物 孟一　平ノト　重橋木城　五百石

一 横田右衛門元秀　橘ノト　稗田波多城　五百石

一 青山采女正渡吉　平ノト　山本青山城　五百石

一 杵島權太郎真久 橘 山崎杵島城 五百石
一 杵島仁平太真利 同 同 百石
一 井手飛彈守度源 橘 芋野新一郎城 五百石
一 土岐伊賀守但佐 橘 佐里館 二百石
一 米澤四郎兵衛和春 源 皆志摩監源貴ノ三男屋鋪城中ニ在リ 五百石
一 佐木近江守稠太 福 稗田 二百石
一 下保 佐内守久 菅原 吉志峯 二百石
一 名古屋和泉守仲秀 菅原 名古屋 二百石
一 名古屋林四郎仲春 同 二百石
一 寺澤 倩平圍昌 峯 同 三百石
一 八並武藏守吉度 伊岐佐村 三百石
一 値賀伊勢守森昌 菅原 値賀村 二百石

一 長渡又八郎信品 菅原 德居村 百石
一 畑津 平内清和 藤原 畑津御嶽城 三百石
一 畑津 左京清貞 同 同所 無高
一 鶴田太郎左衛門度年 橘 筒井村 五百石
一 赤木 左近年秀 源 赤木村 百石
一 呼子九郎太甲光 源 呼子村 百石
一 塩鶴和八郎森春 源 塩鶴村 百五十石
一 向 三郎 武 藤原政保 馬場村 二百石
一 押川四郎九郎春清 平 押川村 百五十石
一 峯 五郎八通方 平 川西下村 百五十石
一 東 多門昌春 藤原 有喜村 二百石
一 双水 喜内相利 源 双水村 二百石

一寺田新九郎一清　一橘　城中住　三百石
一寺田茂三太一保　一橘　同　百石
一鴨打新三郎周度　一平　下平野村　二百石
一鴨打忠四郎周利　一平　同　百石
一大浦志摩守天扶　一平　大浦村　百石
一濃崎　仲　本久　一平　板木村　百石
一梶山林八郎佐清　一平　梶山村　百石
一大杉千太左衛門休度　一在原　大杉村　百石
一馬渡　源太久森　一藤原　梶山村　百石
一徳居四五郎治秀　一橘　同　三百石
一牟田部七郎右衛門只之　一源　牟田部村　三百石
一牟田部源四郎只春　一源　同　百五十石

一南　源三郎保道　一菅原　大川野村　四百石
一川原勘四郎道秀　一平　川原村　三百石
一赤木治部太夫彦芳　一藤原　梅崎村　二百石
一梅崎伊豫守相久　一平　値賀村　四百石
一値賀三郎太吉渡　一源　同　百石
一飯田彦次郎久光　一菅原　神田村　百石
一西浦源一郎時秀　一藤原　同　二百石
一庄野崎治郎周一　一平　庄野崎　二百石
一庄野崎四郎　一橘　同　無高
一中里　九内覚久　一菅原　中里村　百石
一堤　彦兵衛和吉　一在原　赤木村　百石
一濃木五郎七楳昌　一在原　同　無高

一 中浦平太郎資知 〃 〃 菅原 中浦村 百五十石
一 後賀馬太夫品三 〃 〃 云 姓名ナリ 原屋敷村 畑河内村 四百石
一 渕田祐四郎秀里 〃 〃 橘 立川村 三百石
一 原 善四郎源佐 〃 〃 素 大川野村 三百石
一 大曲 大和秀茂 〃 〃 云 姓名ナリ 大曲村 三百石
一 畑島 主膳之政 〃 〃 文 同断 畑島村 四百石
一 畑島二百八之長 〃 〃 平 同 無高
一 星賀九郎市源度 〃 〃 藤原 田代村ミ内 筒井ノ館 星賀村 二百石
一 田代大炊之丞如保 五百石

百人籏本知行現米五十石宛

岩本時左衛門 久保重右衛門 岩本平蔵
岩本兵四郎 一柳兵助 岩本文平
西坂長兵衛 杉原源内 信田林次郎
信田松右衛門 伊勢本一作 西久保喜右衛門
西久保新四郎 相田二百八 伊勢東右衛門
伊勢弥五郎 松本平治 原源丞
原忠右衛門 世渡市郎 村瀬又内
松下四郎次 平山助蔵 松下兵吉
松下又市郎 平山九郎次 松下八平太
松下千代蔵 寺田市平 橋本九一郎
橋本三郎 山田惣市 橋本佐四郎
一柳久米八 一柳吉左衛門 西久保兵八
相田伴四郎 栽木四郎八 松木休四郎
田渡文四郎 周山兵助 橋本安平
山田吉四郎 山中源市郎

橋本久九郎　橋本源四郎　西山佐五郎　西山茂市
栗田市八　西山八郎左衛門　西山四郎左衛門　栗田圭左衛門
西山佐八郎　江利惣内　松坂一八郎　平野金八
松坂新五左衛門　平野四五兵衛　松坂喜四郎　堀田休四郎
松坂九郎左衛門　堀田林助　松坂久太兵衛　松原四良仄
松坂安右衛門　堀田傳八　松坂平五左衛門　江口四郎次郎
松坂七兵衛　立林三八　松坂五六兵衛　立林忠仄
石本一角　森八郎左衛門　和田木林藏　木木林右衛門
江藤久七　井手口安四郎　江藤佐吉右衛門　井手口又七郎
江藤勘四郎　井手口増五郎　木口重三郎　井手口曽左衛門
江林喜太左衛門　井手口久太左衛門　井手口七郎左衛門　山上千太兵衛
井手口五郎兵衛　山上太郎兵衛　久保寺九郎市　松坂千七郎

松坂八郎仄　松坂久五左衛門　松坂徳左衛門　松坂平市郎
松坂千太左衛門　松坂次郎仄　松坂徳次兵衛　松坂元八郎
松坂新四郎　松坂弥市郎　松坂惣五郎

籏奉行

保利三左衛門　菅原度保　屋鋪城中在　三千石

醫師

石橋白山　西原慶保　木下一甫
杉原要慶　大浦不白　竹原清林
森　休伯
大林安保

私按是より以下秦家略傳と有て疑敷事多し文禄三甲午波多家没收せらるゝ迄より以前天正迄の乱世中旧記絶て民間にたゝし此傳慶長以後僧侶の記する所からん其趣用とする所ハ供養追善を修行せり時に此略傳を書記しくるを松浦古事記の末に載せくるへし其真偽混雑計り難し波多家凡そ松浦黨ゝ臣下に至り其封号姓氏名諱等迄分明ならざるもの有るハたゝ太平ゝ世にてさへ貴賤其家系慥々ならざる事有り推して考へ（右記事等乱世の砌り士庶人の間是を録する者なく僧侶にあらざれハ此事に關る者なし亦考へし唯供養追善の目當一圖にして不分明の事方便推量を以て世代封号法名等是を後に載せくるを疑ふ尤其中ハ古代より口碑に傳ふる所其信用すへき事無きに非ず又源平藤橘や菅原在原等を以て録したるも其真偽を知られ然るに假令分明ならざる書法不列を厭ひ是を書載せ方便偽作有りといへとも方今是を削去事ハ時代を考へざるの累も天理に悖るへし唯亂世砌りの有り様を右古事記に略傳として載せくる儘に出し置猶識者の取舎を待つ者也

○秦家略傳

秦参河守源久茂　参河守源久信　参河守源久保
参河守源久年　参河守源久品　参河守源久相
参河守源久和　参河守源久林　大和守源久覺

48587

四十九年大友宗麟 伐取 天德二戊午四月入部
人皇六十二代 村上天皇御宇 三千石
人皇九十一代 伏見院御宇 永仁四丙申年
大小諸士三百四人足軽七百人 所々村々ニ在
壹岐藤右衛門源品旨 組下四人百石宛
中村喜代八 年度 本山金四郎藤原光政
小河兵 炒源吉村 保田村林八源 長
柴田久内允 源秀保 組下四人 今福
寺村八郎左衛門 橘昌度 平山茂四郎紫周秀
西浦幼四郎菅原源年 呼子宗五郎源得保
世戸佐右衛門 菅原秀春 組下四人 知多田村
山崎 左門藤原圓白 松本竹三郎源方品 五百石

林 治郎吉菅原通秀 杉浦善左衛門秦 佐治
村山左 京橘政保 組下四人 三栗屋
三栗伊勢松源寛信 米倉主 水菅原源長
和田木孫四郎平宗源 相田市九郎源一秀
宗田備中守 橘度相 葛原親王十六代孫寧佐三男也
山内壹万八千石 悪代官 知行八百五十石代々小城ニ在
宗田久内佐 橘度光 備中守第二百五十石

畑 参河佐源通 六孫王経基九代孫
伊豫炒源秀
葛之炒源光

参河佐源和　紋九ノ内葛　印一ニ三ツ星也

参河佐源渡

右五代畑城ニ在田十五町差上家臣ト成　永享元己酉年

海士草四万石郡代被申渡　知行　二千石

右代官四人八十石宛

石川宗左衛門通秀　坂本休四郎相松

村上　久次郎源方　江口又市茂和

大庄屋四人

原太郎左衛門　山上九市郎　林源市郎　山本次郎助

脇庄屋百四人

拘多越前守周信　越前守平周保　越前守平周久　越前守平周政

越前守平周好　越前守平周林　越前守平周光　越前守平周春

越前守平周人　越前守平周年　越前守平周品　越前守平周白

越前守平周春　越前守平周一　越前守平周芳　越前守平周方

越前守平周茂　越前守平周佐

人皇四十二代文武天皇大寛二壬寅年元明天皇御宇和銅

元戊申年三月葛原親王孫也人皇九十一代伏見院永仁乙

未四月大友宗麟伐取壹万八千石第上総介人皇九十八代

崇光院御宇永和三乙巳二月添論伐取

按ニ右拘多氏古事記ニ出ス処如此是前ニ論スル如ク大ニ疑ヒ鶴田を釣田ト

前ニ出ス是トモ亦別ナラン越前守ノ封号ヲ鶴田家ニ在りとゝ（とも）十八代也

同一封号ナレ殊ニ鶴田家ハ松浦黨ゝ（ゝ）世ニ光ル源氏と云名諱一字也

爰ニ出ス処ハ平姓ニ―テ二字諱ヲ付ル時ハ別家ナル事明ラカ也猶考ヘ―

葛原王子十八代孫
波多伊勢守好政　嘉暦二癸辰年入部

嫡子丹波守好度
次男小田原大雄山最乗寺了菴大和尚

波多丹波守好度　應永二乙亥年家督

嫡子参河守好久
次男　黒川左源太夫
三男　鶴田越前守
四男　鶴田因幡守
五男　鶴田太郎左衛門

別記ニ越前守ハ因幡守ノ誤ト考ヘ

波多参河守好久　永享六甲寅年家督

嫡子信濃守好教
次男中山安藝守
三男井手飛彈守

波多信濃守好教　明應五丙辰年家督　天文十四乙巳年好久薨ス

波多参河守好清　永禄八乙丑年家督　實父ハ安部氏波多氏義子ト成

○親公配所奥方ヘ書翰

一筆残シ―まいらせそろ我身事かくなる行ハハ前世業因と
や云人御身事ハ兎ル角も老中の面々別て岡本家ハ因縁

し深くいま、談判可有之い誠にたのみまいらせいハ度
次郎事宜敷守立ル様たのミ入い偏ニ奉たのみまいらせい
ふ――め儀コレハ〳〵ゆふ暮ちゝくれよ、有増深ミまゝ
三月九日　好清

秀の前へ

ゝ清の露もとめ雲や世の中ふかくれさるいにを刈ぬ哉ら人

一筆申残ル口上ニ覚

一此度不運ニ罪竟志摩ゝ仕業也然ゝ彼等に仇を不報柔
和城渡――可被致ル事

一拙者子孫武士ニ望無ニい武具ハ先城其祖秦大和守久
覚公御同様早城埋可被申ル

一用金ハ諸侍諸足軽迄配分可被致ル

一代々ニ系圖ハ孫三郎ニ渡可被呉ル雑音已後ハ武士ニ
望相成不申ル様氣ゝ付可被呉ル

好清

岡本山城守殿
久家玄蕃丞殿
太田備後守殿
松尾入道殿
奈良崎伊豫守殿
中山安藝守殿
井手飛弾守殿
黒川左源太夫殿

青木市之進殿

別冊二十四頁と面々は宜敷可被申呉ル

私按麦に主家大変當テ忠義の心俗に知ラルヽ程の人と見へて各々人名の下に狂詠を書しさり其詠歌何も達しさる人の和歌に非れ是も亦僧侶の中拙き人の鄙言を以て其忠義の意を粗汲ミ取り推量して意を述さるものなら人然バ言葉の巧拙にかゝはられ其時の人の思ひより出れを聞て其赤心を窺ふ便りなきに非れ假令言葉ハ賤しくとも其砌りの僧侶にあらざれバ言ひかさし手廻陸尺迄然り考へ知へし仍て削り含てれ鄙言の儘麦に出れとの也

○臣下趣意を取て當時の僧侶の鄙言

寺田新八一方　我家も一らくあらぬ主恩の父子も残られ御供して行

同　新六一度　一信ハ君の御供の詫をして残りて跡て法の身と成き

同　新次郎一信　露の身を草葉の上に置なら残りて誰ふ何と云譯

木下大膳度覺　ぜひ〳〵ふ摩に應して死を急く恨を跡て志摩〳〵式部ふ

毛利壹岐實相　君の代の短き御代の死出の供父もろともふ永き未世ふ

峯　丹後道度　もちやく〳〵と死期を爭ふ恩さよとちやほらぬ身の迴蓮ふ

江里長門度秀　南無佛の弥陀の御国ふ御供してをちをと助者て待そおく

河添監物實道　各〳〵や我も急々かゝ佛立弥陀の御国ふ君の御供

横田右門度保　志摩子孫たやして施主の面々ふ死しさる功ハ跡て了ぬ

杵島権太郎周白　ふーぬけと云ハる方も有つゝ軍をせても志摩ハ不ろはた

保利要人丞和昌
下條武太夫久一
長渡五郎八相實
名古屋和泉林度
赤木　左近得度
徳居又兵衛金方
寺田新九郎一春
川原勘四郎一保
赤木治部太夫椿覚
東四方四郎度保
双水　信濃一芳
鴨打　道可相覚

我死て供をいさぬやさやらせは秀吉公ゑ仇を報いん
弥陀佛を頼む誰人愚かさよ君城を護て志广ゑ仇せん
生替り死かとりして寺澤々子孫絶て意趣をもらさん
我死て魂を直ふ夜及らせ何秀吉公ふはみて仇せん
鬼ゑ角も君の御跡きゝ行守護て志广ゑ仇を報いん
井手青木嘲我々をさきはん軍をせいて死出の旅立
一春を君の世継を辛苦して育あけさるその甲斐もなし
夜及らせ何名古屋の城ふ住あらい子孫いくてたいまらもなし
木を枯て山青々と茂るゝ知ふ離きて赤い川ゝ
ゝさらい弥陀の御国ふ急き行只叫川迄も君を守護せん
我人もおんをく爰に留りて志摩や式部に仇や報いん
鶴田家や嘲青山やよろこをん寺田も死て拝島も死て

大浦　志摩信人
大杉專太左衛門白林
年田部七郎左衛門昌保
毛利　七郎光林
毛利十兵衛光久
中山四郎太利春
山中　林八道秀
竹有　休九芳一
木山　乙祐芳信
寺西　百仆信久

志广ゑ家子孫ふ續くとのあらい家の系圖いもふこゝり
奥方の上意ゑ我も死て行うへこく供ふ一乗法の道行
我君の上意に背く大不忠未来ては地いとくと　玄譯
獅子身中の虫と知らずふ寺決をかへ置れ君のおとくよ
秀吉ふ代りに威勢の強くとも我命力て家いほろぼす
志广式部兵部太夫ゑほろひさら鬼ゑ角ゑ君の御側ふ
弥陀佛誓の網い鬼ゑかくふ我い未世ゑ君乃御供
たくれこと思ふ我身の愚かさよ魂々飛て君の御側ゑ
志广ゑ家ないい子孫いくさ独て死ゑこゝへて彼ふの家をほろぼ
寺西も弥陀の浄土ゑ駐件て君を守護せん　末ル　信繁

弥陀佛すはみ　南無三世佛　手廻り　乙平
我身をい導き給へ南無三世佛

我々供を急ん身なれとも下ゟ人席ゟ力およばぬ　同　又平

極樂の弥陀の御舩ゟ竿さして孫をんの岸に君を渡さん　陸尺　林平

鶴飛へい蠅の爪ゟ川心地して弘誓の舩ゟ竿さしてり　同　竹奴

御供ゟ我ゟ急ん死出の旅　同　市平

三途の川て君我ゟさん　同　久奴

誰それとゝふゟ無く我ひとり乗りて渡ん彼岸の舟　同　主平

孫三郎ヶ条書事

一院内什出入有之一寺ゟ軒を屑るといへとも論地ヶ間敷事

一法戒し輩ハふよやうの面々吟味を遂ゞれせふうと不厭公邊ゟ相達可被申渡ハ此旨子々ゟ面々たいちやう

一士農工商出家ハ勿論子々てき宇の人子孫繁栄也婦無の家ハきいてんきる也

一二君ふ仕へて權威をふり主人ハ滅却させ剰国郡を貪る事獅子身中ゟ虫ゟおとる人智徳といへとも謀計ゟて智徳とし人徳ゟして人徳ゟあゝ已ゞ利潤ハ顕然ゟ天罰に端的子々在り即今癩病滅〻滅威一好ゟゝゝへ行末見届父や先祖へ冥途の土産時節来ゟとゝ也

一 甲乙の医二百八斬の面々老々の末迄天地人と三文迄
ハ云ふ及バも四節共に天神地祇を祭る事才一専用也
且雪隠に唾を吐れ大地大小便かゝく禁も亟き事七歳
未満の間其土地を穢に事多故祭らさる人ハたゝ有る
也病難岩来もる也
右聖徳太子堅く可慎教也
一 先祖建立し諸寺院の面々子々てき〳〵才一也
一 先祖主君を忘れ者ハ泥ふるふる也
一 士農工商ふ生き名乗を用さる者ハ穢多の下座也人と
して仁義禮智信の心に主とせざるハ理法權の三等を
用ひも異見ちやうして己ら身破滅もる也
一 幼少ふして親ふ離れさる者羽無き鳥ふ似さり誠我等
兄弟地ふもおもき親ふおくき孤と成る事前世の業因也
剰天地人の三文ふ欠さり祭らされハ祭らさるの道理
也来世も亦斯有へし と心根ふ徹し夜も日も忘らさし
ハ也天神地祇鹿庭有之子々繁栄祈る處に
一 天地人の三文を祭らざる人ハ右の 似さり大海の濁り
水渇水もれハ清き川に流るゝ水濁りさる時ハ必たいて
人もるふ如し祭らさる人ふ子孫絶ふと同し
一 浪々北面々子孫堅く禁もる事田畑岸屑らも水論不仕
若し岸畔ハ悔り取論地ふ仕ハ家ハ不繁昌可仕事能々可
慎事
右二十四頭し面々我臣ふして臣ふあられ先祖ら波多
家守護せんふ為御位を譲られ子々孫々北間主徒と

おて天爵現在波多家に有此兆万々業をはくしかたし

按ずるに又狂哥あり前に論する方便家の徒其意を汲んで狂詠し波多孫三郎が名にしるしるものなるへし實に鄙言なれとも前書に云へる如く時代の趣を探らん便りしるべと古事記の儘麦に出た

奈良崎や行先とても中山と世とくらりも無き山田に栖住む

梅に好清公の配所なの書翰に奈良崎伊豫守中山安藝守在り又家臣付北面に人々の中に山田采女と云人右三人姓名出さり

鶴田でも鴨田に劣る愚人あり波多家にさとる鳥名為

同鶴田太良左衛門鴨打新三郎此両人家臣付に有考へ

義士もへに時節松尾が城よりでもあとゝ小きび名藤田に栖まむ

同松尾阿波守家臣付に有り松尾城に松尾和泉守と有り

呼出しみやくとはなふて武を捨て真行に栖ハのり北身となれ

武家も屋ふ庄屋も屋ふをはらへ(ゝ)あきらめて我ハ北てこそてもせた

悔ふ(い)ま死ぬく屋ふ(し)ハ法身を捨て庄屋と栖ま哉

鶴田家のはてと稲葉ハうも果ていとハさ久て波多ふめこまる

弥生廿六日　波多孫三郎

松尾主水正殿

貴様哥道御好被成ゝ故懸御目ゝ御覧後ハ火中ノ〳〵

○波多家僧侶の追號

一	政源院	人皇四十五代	聖武天皇御宇
一	政林院	同 四十六代	孝謙天皇御宇
一	政相院	同 五十一代	平城天皇御宇
一	政季院	同 五十六代	清和天皇御宇
一	政道院	同 六十一代	醍醐天皇御宇
一	政保院	同 六十二代	村上天皇御宇
一	政覺院	同 六十六代	一條院御宇
一	政宗院	同 六十八代	後一條院御宇
一	政久院	同 七十代	後冷泉院御宇
一	政度院	同 七十二代	白河院御宇
一	政好院	同 七十三代	堀河院御宇

天平二十年戊子九月廿日
宝字二年戊戌七月廿日
大同四年己丑四月十日
貞觀十七年乙未四月廿二日
延喜二十一年壬午三月三日
天暦八年甲寅四月廿日
正暦五年甲丑九月廿日
寛仁三年己未七月十二日
天喜三年乙未三月九日
永保二年壬戌九月廿日
長治元年甲申四月十七日

一政恭院　同　七十七代　後白河院御宇　保元二年丁丑六月廿日

一政得院　同　八十三代　土御門院御宇　元久元年甲子九月廿日

一政真院　同　八十六代　四條院御宇　文暦元年甲午三月九日

一政角院　同　同　仁治三年壬寅正月廿日

一政屋院　同　八十九代　亀山院御宇　文永十一年壬申八月四日

一政昌院　同　九十四代　花園院御宇　正和元年壬子九月十二日

一吉峯城主波多伊勢守好政　嘉暦三戊辰年四十二歳ニ而入部　治世六十八ヶ年

法号好政院殿蘭度玄芳大居士　應永二年乙亥七月十二日　百九齢ニ而薨

一同　丹波守好度　治世四十ヶ年

法号好度院殿夢吉了相大居士　永享六年甲寅十月八日　九十八齢ニ而薨

一同　三河守好久　治世六十三年

法号好久院殿白用道雲大居士　明應五丙辰年隠居之時ニ九十六歳　天文十四年乙巳八月十八日　百四十五齢ニ而薨

一同　信濃守好教　治世七十年欠　本書ニ六十九年ト有

法号好教院殿蘭山了無大居士　永禄八年乙丑二月九日　百八齢ニ而薨

一同　三河守好清　治世十七年ト在之ハ得共三十年欠　朝鮮御帰陣ヶ節直ニ流罪ス

法号好清院殿大翁了哲大居士　文禄三甲午年三月九日四十二齢ニ而薨

或書ニ曰釜山海湊ヨリ直ニ常陸國ニ流罪三年目配所ニ而遂去ヶ由黒岩村醫王寺ニ前三列大守大翁了徹大居士位牌有之不審也又諱親ト一字見ル

又或書ニ流罪ヶ砌御内室吉峯城ニ火掛ケサセ山本村青山城ニ移御自害有之由法号心月瑞圓大姉墓所岸山村ニ有之印ニ松木有之ト云

一文禄三甲午年三月八日各法名　舩翁何々信士ト有り略之

竹有久兵衛　立川百藏　千々賀久七　古戸源次
馬渡惣十　川西惣弥　神田惣八　中里喜代治
山田十藏　大里主税　寺村茂右衛門　平山千治
有喜安郎兵衛　山中十八　鶴田源次　有馬源七
寺村茂三太　出野久次郎　中村九十九　村山一九
中村久八　平山久弥　中島久太　神吉新次郎
山本二百藏　清水三代松　好久十兵衛　串乙吉
田中忠兵衛　川西忠八　以上三十人

一同九日各法号　何々何々居士ト有り略之
舩翁春山了相居士　毛利七郎光林　毛利十兵衛光久　中山四郎太利春
寺梦郎兵衛元春　中山林八道秀　西村五郎兵衛林春

竹有休九芳一　寺西郎三郎信林　寺西百次信春
平山七次芳道　徳居又兵衛金方　寺田新次郎一信
寺田新六一度　寺田新八一方　寺田新九郎一春
木下大膳度覚　毛利壹岐實相　峯丹後道度
江里長門度秀　川添監物實道　横田右門度保
杵島権太郎周白　保利要人丞和昌　下保武太夫久一
名古屋和泉林度　長渡五郎八相實　畑津内記光方
赤木左近得度　塩鶴右兵衛光寛　赤木治部太夫椿覚
鴨打道可相覚　東典茂四郎度保　相水信濃一芳
大浦志摩信久　大杉專太左衛門白林　川原助四郎一保
牟田部郎左衛門昌保

以上三十七人

外法名何〻何〻信士略之

辛酉　乙平　辛酉　徳平
同　万平　同　又平
陸尺　林平　陸尺　竹仗
同　久仗　同　市平
同　年平

右此人々以用金徳居村於瑞巌寺僧徒三百人ニ而四十九日
大施餓鬼供養有之云

○波多庭代牧番津守

一馬渡島　牧番　無足三人　足軽四人　津守　無足三人　足軽二人
一向島　津守　無足二人　足軽二人
一加唐島　津守　無足二人　足軽二人
一小川島　津守　無足二人　足軽二人
一神集島　侍二人　無足二人
一加部島　侍二人　無足二人
一名古屋　津守　無足四人　足軽四人
一外津　津守　無足二人　足軽二人
一入野　津守　無足二人　足軽弐人
一今福　津守　無足五人　足軽十人
一納所　津守　無足二人　足軽二人
一三栗屋　津守　無足五人　足軽二十人

高札

一波留竹一　金須一　鰯町一　小城一
三栗屋一　金福一　名古屋一　ノ七ヶ所

町数

一古町十三町　馬場　本町　一町目　二丁目　三丁目　四丁目　五丁目

川揃町　一丁目　二丁目　南本町　西本町　山下町　大久保町
看屋町　今京町
一　連哥屋町　一丁目　二丁目　三丁目　四丁目　西町　京町
本町　坂下町　寺坂町　今下町　ノ

○阿蘇大宮司惟直墓

松浦郡ト小城郡之境天山嶽ノ頂上ニ在建武三丙子年足利尊氏典官軍新田義貞戰不レ利九州ニ走リ時筑前國多々良濱ニ於テ官軍肥後国菊池氏ト阿蘇大宮司惟直ト共ニ足利尊氏ト戰ヒ不レ利惟直松浦郡天川山ノ内小杵山ニテ自害ス遺言シテ故郷阿蘇山ヲ見ヘ所ニ葬スヘシト也因テ此所ニ埋葬ス石塔臺ニ高サ四尺一寸臺一尺二寸四方也五輪塔在リ

一　天山岳小城松浦両郡境也松浦郡天川山兼ヨリ絶頂迄廿六丁天川山庄司宅ヨリ同廿八丁也（此邊五村ヲ五ケ山ト云村ヲ山ト唱ル也天川山ハ一村ノ名ナリ）

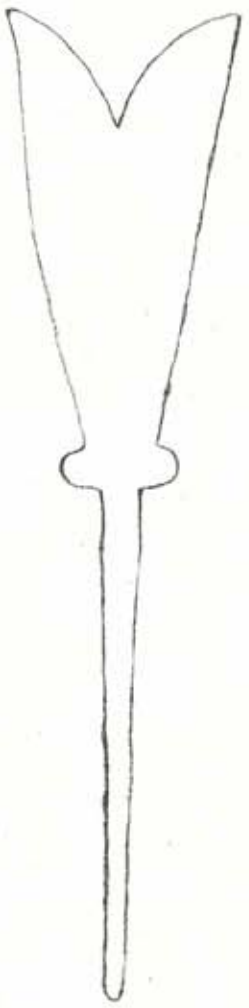
一　小杵山天川山ノ内ニアリ東西八十間南北百三十間雜木山也麓ヨリ絶頂迄七丁荊棘（バイラク）山氏云惟直自害ノ地也同臣下ノ墓同所ノ内通石山（トウシヤサン）ニアリ是ヲ五人塚ト云右小杵山ノ内ニ惟直自殺ノ場所ハ天川

山ノ人家ヨリ廿六丁アリ山ノ中ニテ先年ハ石ヲ建其脇ニ松ヲ栽立有之処
野火ニテ焼失セリトス

一通石山ハ天川山ノ内ニ在リ麓ヨリ絶頂迄六丁草野也天川山庄司
宅ヨリ一里也絶頂ヨリ少シ下ニ大石アリ高サ數丈廻リ五丈八尺此石ニ
通リヌケタル穴アリ此内ニ通石權現トス祠石在リ此山ノ半腹ニ五人
塚トス古墳在リ惟直ノ臣トス其生害ノ所ハ右小杵山ニテ五人塚ヨリ
小杵山迄五丁餘アリ此五人塚ノ絶頂大ニ平地也合戦ノ場所ト
申傳フ又此所ニ別ニ十四五ヶ所モ生繁リタル所塚トモ云ヘキモノアリ五
人塚モ其人名分明ナラス惟直ノ臣下ト申傳フノミ也

豫ハ藏ナルヘシ

鏃形



右鏃形ハ當時天川山百姓利平ト申者ノ先祖右戦場ニテ掘リ
出シ今ニ持傳鏃ノ形如此

一嘉永五年子天川山ノ中ニ崩ヘノ坂ト申所ニテ鑓ヲ掘リ出シタリ天川
山良右エ門ト申者薯豫堀リノ節出タリ其鑓旅人賣渡右ノ者所
持不致ト也

一　阿蘇大宮司被下所之　綸旨如左

被　綸旨係

肥後國阿蘇郡任舊例一円所被付社家也早致管領奉祈

勅願者

天氣如此悉之以状

元弘三年四月二日　勘解由次官判

阿蘇大宮司館

係ハ

付ハ

後醍醐

肥後国阿蘇郡任先度　綸旨止方々濫妨可全勢者

天氣如此悉之以状

八月六日　式部少輔判

阿蘇大宮司館

阿蘇郡四至堺事任兼歴国宣可致沙汰者

天氣如此悉之以状

元弘三年十月二日　式部少輔判

阿蘇大宮司館

肥後国甲佐健軍郡浦ホ三社山本家領家之号付本社可令

管領者

天氣如此悉之以状

元弘三年十月二日　式部少輔判

阿蘇大宮司館

豊後国大佐井筑前国下座郡ホ地頭職可令支配一族ホ者

天氣如此悉之以狀

元弘三年十月三日　　右中弁判

阿蘇大宮司館

雜訴決断所牒　　肥後国守護所

當国阿蘇社大宮司惟直申社領阿蘇庄四至堺事

右任兼歴国宜可相渡彼堺者以牒

元弘三年十一月四日　　右衛門大尉坂上大宿禰判

左中弁藤原朝臣判

雜訴決断所牒　　肥後国衙

當国阿蘇社大宮司惟直申社領阿蘇庄四至堺事

右任兼歴国宜可相渡彼堺者以牒

元弘三年十一月四日　　右衛門大尉坂上大宿禰判

左中弁藤原朝臣判

相催一族愛向鎌倉可致合戦之忠帰参之時別可被行勧賞之由所被　仰下也悉之以狀

十一月廿二日　　左

阿蘇大宮司館

名字無之共故花押ヲ寫シ之

注進軍勢不慰賞軍帰参之時急可有其沙汰由所被　仰下也

可致存知悉之以狀

十一月廿三日　　判　同上

阿蘇大宮司館

足利尊氏同直義以下輩反逆企ミ間所被追討也相催一族
幾向鎌倉可致軍忠者
天氣如此悉之以状

十一月廿八日　　左少弁判

阿蘇大宮司館

同時惟直父前大宮司惟時ニモ同文、綸旨アリ然トモ惟直ハ此合戦ハ
在国シテ父惟時ニ鎌倉ニ幾向シ箱根山ニ合戦シ武功アリシ由ナリ

尊氏直義以下凶徒没落鎮西ニ云々相催一族并薩摩国地頭
已下軍勢者可被追討者
天氣如此悉之以状

三月廿五日　　右少辨判

阿蘇大宮司館

此時惟時ハ猶在洛セリ

此　綸旨多々良濱ノ合戦ヨリ廿三日後ノ日付ナリ又此月廿日
惟直父惟時薩摩國守護補セラレタリ

牧与次秀廣むさうけ記

あそのたいしやう大明神一ゑん御きさんのそんしゝ下の正
文の事建武三年三月ゝこれをせめをんたいしとのをも
ゝらをはのけゝつせんうちまけひせんの國をぎのこゝをも
あめ山といふところにてをらきを給ふ時かの御もんゝ

にきのふくろに入なるふみをにありける城同こ
ゝりぬる内といふところ百さうこれを見付きて所のち
とうの女さやうにたてまつりさるよしうけ給いるどい
へともさゝ付さやうにふきうへわらさめたうようにあらさ
れハまらりすくるところに同三年七月十三日とらのこくむさ
うに所うのきにていとくかのもんしゞまゝさいの神の御
堂からありはのそにきよ申すへ一と云さりといへと
もたゝいまうきうと存きるうへてんかのどうらんにうち
はきれてまかりすくるところに同五年六月二日夜むさ
うちきのとしよてをそでにをやうどにたよぶあひゞ同
五日はのそへひきやくをもて申入をハんぬさに同十七日
夜半をかりかさねてあめのはきをありていをくそう二人ゑ
くに二人おとこ二人きさりてかの御もんさよをかふへ
きよ申ところに又十二三をかりなるどりトさゝの業
をもちきさりて仰せらるゝやうゝいゝ人〳〵もか
ふふへらゝにこれをさゝへよなんちをこの二三ねんひ
ぜんのくにをぎのこふりにおきさるいかゝもんさよに
うへさるもなんちらすやかせんの時うちにしてを
でに三ヶ日まてあり〳〵我こそたをけをりしら大明神の
御くめにハをはこゞ祈といふとも此これるすぎさるたらら
あるべゝゝれかくいふわれ丁巻大明神よとてさゝの系
ゞうちぬり地のうへきをさぶい〳〵にはゞゝせ給ふて天
に上あかり給ふと見てゆめさめぬ矣
右で言〳〵いゝをり申さい日本六十餘列の大小神祇と

に阿所十二宮大明神の御ものをあさなしていろ〳〵八万四千のけものあるにまかりかゝるべくれ仍きさやうしん〳〵状如件

建武五年六月十八日　藤原秀廣判

此秀廣ハ惟直ゆ屬して多〻良濱向ひし人なれ〳〵當国の人なれ不詳

肥後国隈牟田庄内大友千代松丸跡同国守富庄小地頭職為惟直惟成勲功之賞可被知行者天氣如此巻之以状

興國三年六月廿日　左少弁判

阿蘇大宮司館　此綸旨又惟時ニ賜ハル所ナリ

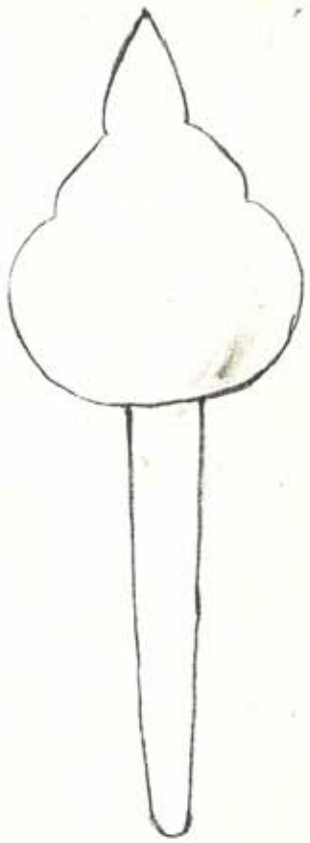
其餘征西大将軍ヨリ父惟時ニ賜フ　令旨モ兩息致命於君同時討死頻無比類欲ト賞誉令旨アリト雖モ今畧ス

愚按夢想ノ怪説如クナリシニ何ソ是ニ拘ラザル人ハ決テ此夢ヲ視ルナシ秀廣誠心常ニ忘レズ惟直戰死ノ後夢視ルヿ左モアルベシ右假名文部シトシテ父輕蔑スベカラス所謂鬼神来格スルハ至誠ノ為ノ如乃天理也方便説等ノ私心ヨリ出ハ決シテ無キヿナシニ其平生忘カタキ誠ヨリ夢ニ入テ如此ナルモノナリ斯ノ為ト思フ心盛ナル時ハ夢寐間ニ見ルヿアリ実誠心ノ為ノ如也

又曰如此惟直勅命ヲ受テ朝敵ヲ滅サント思フ誠忠天地間ニ盈テ人是ヲ知ラザル者ナシ其從臣迫斯ノ主人ニ徇死シテ君臣道ヲ履ミ天地ニ建テモ萬古ニ通テモ恥ルヿナキ大道ヲ行ヒ得タル志ハ

鄙野賤民ニ至テモ惟直ノ墓又戦死ノ場所ニ云フヲ知ラサル者ナシ古代事多クハ墓印モナキヲ下リ墓アリテモ碑銘モナキモノ多シ然ルニ惟直ノ墳塋ニ於テハ誰モ知ラサル者ナク其戦場ヤ自殺ノ所ナド今ニ口碑ニ傳ヘ疑フ者ナシ是忠ノ天ニ通シ萬世疑ハサル処乃チ天理ニ本ツト名ル誠忠ト云ヘシ

松浦郡池原村枝郷嶽の川　乙次郎所持し鍬



右者神谷同郡鳥巣山源吉ト申者ノ三代目程ニ当リ同ク源吉ト申者小杵山の麓字陣の平ト申所ニ厳の根掘の節右鍬ト掘出シ当時乙次郎迄持傳近来唐津侯ト内長谷川文ヲ与

申人所望ニ付譲ル右祖源吉鳥巣山ノ嶽の川ヘ田地ヲ開名受ケ池原村枝郷ト成古陣の平ト申所古戦場ト言傳右源吉時代頃太刀の折或ハ鍬度々掘出シ之ル由なれ共腐フ不用立捨ル由を申傳

一　弓折　池原村ノ同郡平原村ヘ山越道の地名ヲ云

是ハ大宮司惟直筑前多々良濱の追手近付ク之時者敵ヘ矢を放ツ人とされ一時弓中ヨリ折レ其所ニテ戦ヒ数ヶ所手負漸ク敵を拂ヒ山越ニ池原村遊茅ヲ申辻ヲ越ヘ下の深谷ニ忍ヒ一夜を明ー手疵ニ苦シ夫ヨリ小杵山の蔡陣の平ニ行掛リ又々追手ヲ戦ヒ無利ーて終ニ自害有リと申傳

一　夜咥坂　右遊茅の深谷ヲ斯く唱る也

48587
0791
15集
16-8

縣立佐賀
24.11.18
圖書館

45